

【論 説】

高木惣吉と六韜 ——太平洋戦争の教訓——

下 平 拓 哉

目 次

- はじめに
- 1 六韜の意義
- 2 六韜の特徴
- 3 太平洋戦争の教訓
- 4 兵学の教え
- おわりに

はじめに

太平洋戦争末期、日本の敗戦が色濃くなるなか本土決戦を阻止した海軍軍人、高木惣吉海軍少将は、希代の軍人学者である。西田幾多郎や田邊元といった京都学派とのつながりが深かったことは夙に知られているが、その高木惣吉が「水心兵学」と呼ぶ『六韜』をこよなく愛読し、『六韜』を通じて太平洋戦争における日本と日本海軍について分析し、『六韜新論』と『六韜漫談』をまとめあげていることはあまり知られていない。

『六韜新論』の「あとがき」では、次のように太平洋戦争の教訓と現代的意義を『六韜』に求めている。

初めの構想は、わたくし自身の兵学思想に六韜を織りこんで見たかったのですが、それには長篇となるばかりでなく、六韜の好きなN君には興味も外れることであろう。これはN君に謹呈するものであるから、構想を改めて六韜を主にして、わたくしの体験からその現代的意義を掴むことにしました。（中略）兎に角

高木惣吉と六韜（下平）

わたくしは、この第二次大戦、太平洋戦争という幾多の尊い生霊を犠牲にした大災難の教訓をわが國民が不用意にも朽ち捨てて顧みないのは實に驚くべき麻痺症状であると思っています。勿論、N君の机辺にこの記録を留めることができるのは、或はそこに不可思議なる天意の存するものがあるのではないかと期待するのがあります¹⁾。

このように、日本に多大な災難をもたらした太平洋戦争の教訓とその現代的意義を『六韜』に見出している。本稿では、高木惣吉が『六韜』について研究した『六韜新論』と『六韜漫談』を通じて、まず『六韜』の意義及び特徴について整理し、高木惣吉が太平洋戦争における日本と日本海軍についてどのように分析していたか、主として太平洋戦争の教訓について明らかにする。

1 六韜の意義

『六韜』とは、中国の代表的な兵法書で、武経七書の一つであり、そのうちの『三略』と並び称されている。一卷に「文韜」「武韜」、二巻に「龍韜」「虎韜」、三巻に「豹韜」「犬韜」の60編から成る。兵法の極意を意味する「虎の巻」は、この「虎韜」からきており、ちなみに「韜」は剣や弓などを入れる袋の意味である。三国時代の戦乱の下で書かれた権謀術策の『六韜』は、政治・外交と軍事の関係のあり方、つまり理想をその史的教訓から導出したものである。「大化の改新」の中心人物である中大兄皇子の最大の腹心であった中臣鎌足は、中国の史書に関する造詣が深く、『六韜』を暗記していたと言われる。

皇極天皇4年（645年）6月12日、飛鳥板蓋宮において、後に天智天皇となる中大兄皇子と中臣鎌足らが蘇我入鹿を暗殺した。翌日、蘇我蝦夷が自らの邸宅に火を放ち自殺したことにより、蘇我体制に終止符が打たれた。この「大化の改新」とは、蘇我氏など飛鳥の豪族を中心とした政治から、天皇中心の政治への転換点となったという極めて大きな歴史的意義を有するもので

ある。そして、中臣鎌足は、忠臣の鑑であるとされ、『六韜』は忠の心を形成する礎であったのである。

昭和24年（1949年）1月5日、高木惣吉は、辰巳亥子夫というペンネームによって『六韜新論』と『六韜漫談』を書き上げている。その中において、『六韜』について、為政者と民衆の関係について次のように説明している。

六韜においては、一見民主思想の精髓のように読みとらるる名言の背後に君権思想が根を張っている。（中略）治乱興亡のあとを訊ね堯舜以来禅譲にあらずして放伐、篡奪であった易姓革命の真相を捉えて、民衆福利の増進がいかに大事であるかを強調した。

高木惣吉は、『六韜新論』において、国民に焦点を当てつつ、古今東西の兵学書の教え、過去の戦訓、自己の経験を織り交ぜて分析することにより、太平洋戦争の教訓と現代的意義を導出したのである。

2 六韜の特徴

高木惣吉は、『六韜新論』の第七章「古典兵学」において、日本、欧州、ロシアの兵学を比較しつつ、『六韜』の特徴について次のように分析している。

(1) 日本の兵法

わが國に傳はつた兵法は、神代傳、御所傳及び後漢傳の三流と稱えられます。

神代傳というのは、神代の兵法の傳えられたもの。

御所傳とは、神后皇后、武内宿彌の實施した兵法となつていますが、果たしてこの神代傳、御所傳なるものが体系的兵法として純粹の形で傳えられたかは實に疑わしく一種の神秘的傳説にすぎないのではないのでしょうか。

後漢傳は、大江維時が支那に留学して多くの兵書を携えて皈朝したもので、いはば清國傳來の兵法はこれに含まれることになりましょう。後年、匡房が八幡太

高木惣吉と六韜（下平）

郎義家に授けたのは、この大江家の後漢傳であったとのことであり、義家は匡房の厚意に報ゆるため源家家傳の御所傳を以てし、尔来、大江家は和漢兵法の宗家として残ったと称せられています。

日本の兵法には、神代伝、御所伝、後漢伝の3つの流れがある。神代伝とは、神代の兵法であり、御所伝とは、神功皇后及び武内宿彌が実施した兵法である。『日本書紀』『古事記』によれば、神功皇后は、武家社会の神である八幡神の母にあたる神であり、朝鮮半島の広い地域を服属下においた三韓征伐を行い、数多くの武人から崇拜されていた。武内宿彌は、大和朝廷初期に、景行・成務・仲哀・応神・仁徳の5朝に仕え、神功皇后軍の下において新羅出兵などで功績を上げた。蘇我、葛城、平群、巨勢の祖と言われている。

越後流は、謙信流とも謂い、上杉謙信の兵法で、神代傳、御所傳に源すると伝えられているが、これらを批判するの資料は十分ではありません。唯謙信の戦法を祖述したもので宇佐美良勝（為直又は定行と異名あり、上杉家武者奉行）これを体系祖述したもののようであり、

越後流から上泉流、北條流を経て素行の大成した山鹿流となったのでありますが、又別に後漢傳から系統をひく甲州流から徳川流を経て同じく山鹿流に合流しております。

越後流の經典と見らるる武門要鑑抄、武経要略は老子及び七書の思想が多く、わが古来の武教が余り明瞭に判別できないように認められます。その点では寧ろ『門戦経』は漢傳來の兵法をも批判してありまして、その裡に上古のわが武教ともいべきものを伝えるものがあるのではないかと思われ、眞鋭を説く日本傳と、詭譎を述ぶる後漢傳との綜合を試みたものとも観られます。而してその神武を強調し、兵道は能く戦うのみと喝破するあたり、儒佛の思想も咀嚼されておるといえましょう。

越後流は、神代伝、御所伝を源流とし、北条流などを経て近世期に山鹿素行の山鹿流に合流している。太平の時代に入って、武士としてどのように生きるべきかという武士道についての理念をまとめており、広く普及すること

となった。

そして、真を説く日本の伝えと偽りを説く後漢の伝えの総合を試みた『鬪戦経』を学ぶべきと総括している。『鬪戦経』とは、平安末期に完成した日本最古の兵法書である。「兵は詭道なり」、つまり謀略などの騙し合いを重視する『孫子』はそのままでは日本には合わず、このままでは、中国の春秋戦国時代のように国を脅かすこととなると危惧し、兵としての精神・理念を強調した『鬪戦経』が不可欠と分析しているのが最大の特徴である。

(2) 六韜の起源

漢書藝文志道家に太公望の兵法著述は謀八十一篇、言七十一篇、兵八十五篇、合して二百三十七篇とあります。更に隋唐経籍志には太公六韜五卷、太公陰謀一卷、太公陰符鈴録一卷、太公金匱二卷、太公兵法二卷、太公兵法六卷、太公伏符陰陽謀一卷、太公三宮兵法一卷、太公書禁忌立成集二卷、太公枕中記一卷、周呂書一卷を掲げています。

六韜を太公望の撰としたのは右の隋書経籍志に始まったのでありますが、漢書藝文志儒家に周史弼六篇とあり、莊子徐無鬼篇に女帝が金版六弼云々とあり、袁宏の後漢記に太公の六韜云々とあり、三國志蜀先主傳にも間暇曆觀諸子及六韜商君書、云々とあり、聞丞相為字申韓管子六韜一通已畢とあるのに照合して、漢魏時代まで太公撰の六韜と信ぜらるるものが存したものと見えます。

その後梁の庾仲容の子鈔に太公六韜六卷とあり、隋書経籍志に前記の太公六韜五卷云々と現はれ、唐書藝文志に六韜六卷とあるのを観ますれば、宋、梁、隋、唐以前に六韜と名付けた兵書の存したことは略確かであります。但し顔師古陸徳明等は、隋唐の際に太公望の名に仮托して本書をなしたものと論定しております。

明邱濬の大學衍義補中に、

『・・・中に正殿を避くるを引けるは乃ち戦國後のことにして云々』

明の胡元瑞は、

『・・・陰符篇に勝敵の符は長さ一尺云々とあるを笑いて撰者符の義を知らずして符節の符と為せり、且春秋に騎戦なし、車戦を主とせり、六韜に騎戦を謂うて評かなるは明かに周初の作に非ざるを示し、又將軍の呼称も春秋以後のことに属す云々』と批判して居ります。

然し六韜全部が悉く後人の俗撰であるとは、断定し難いと思はれます。即ち文師第一の天下非一人之天下、乃天下之天下也は、呂氏春秋孟春紀貴公篇に見はれ、明傳第五の敬勝怠則吉、怠勝敬則滅は大戴記武王踐阼に見はれ、守土第七の日中必彗、操刀必割は漢書所載の賈誼治安策に見はれ、同熒々不救、炎々奈何、兩葉不去、將用斧柯は、賈誼新書の審微に見はれ、又龍韜の論將第十九、選將第二十は、大戴礼文王官人と相通じ、その戦術、兵器に関した部分は、孫子及び墨子の詳述ろ見ゆる点が多いのであります。

杜佑の通典に記載された太公望の兵法なるものは、現行の六韜と相類似するものが多いところから、漢魏以前に伝えられた六韜ら古兵書、諸家の萃を集めて本書を撰したものと推定する通いといえましょう。

『六韜』の起源は、太公望の兵法である。太公望とは、紀元前 11 世紀頃の周の軍師で、後に齊の始祖となる呂尚のことであり、周の文王・武王に兵学を指南した。その兵法が前漢、後漢時代及び魏晋南北朝時代に体系化されていったと考えられる。

(3) 六韜の特徴

六韜はいろいろな点に特徴を持っていますが、七書中の他の兵書や鬼谷子あたりは概ね天地陰陽、論將、撰將、戦法、兵器、地形、用間等に終始しているのに比較し、六韜は治國平天下の大道、人間學、組織學等に迄広く論陣を進めておるところであります。中國及びわが國の從來の学者は龍韜以後の四十三篇が具体問題を評論して価値がある（葉適）ように評するのでありますが、私見によれば寧ろその反対であって龍韜以後で味読に値するはその一部で、それ等の部分は遙かに孫呉に及ばないと思はれますが、その文韜、武韜及び龍韜の一部に他の追従を許さぬ独特のものがあると謂えると信じます。

『六韜』は、主として治國平天下の大道や人間學、組織學など広汎な内容を網羅する様々な特徴を有するものである。注目すべきは、『六韜』後半の平野部での戦略を主として論じた「虎韜」や山岳・森林といった地形に応じた戦略に関する「豹韜」、そして、兵の訓練や後方について記述した「犬韜」よりも、前半の部分の戦を始めるに当たっての政治問題や準備を扱った「文

韜」、政治的駆け引きを記述した「武韜」、作戦の指揮や兵力の配置などを示した「龍韜」が傑出していると分析していることである。

高木惣吉が、軍隊の具体的な戦略よりも、政治問題、政軍関係、戦争準備、指揮関係に重要性を認めていたことを窺い知ることができる。

（4）欧米の兵学

欧州におきましては十九世紀前半（一八〇〇、一八五〇）に二つの著しい兵学の流派が現はれました。その一つは、ジョミニに始まる経験派兵学であり、他の一つは、クラウゼヴィッツに依って代表される理論派兵学であります。

ジョミニは大奈翁の参謀を勤めた將軍でありまして、その経験派兵学の流れを掬む人々としては、フォン・ビューロー、チャールス大公、マルモン元帥、フォン・ヴァレンチニ、ウィリーゼン等であります。理論派兵学に属する人々としては、グナイゼナウ、シャルンホルスト、ミュワフリング、クラウスネック、ライヤー等があります。経験派の沿革と特色は大奈翁の赫々偉業の研究に燃ゆるような情熱を注いだこの一派は、その戦争から千古不廉の教訓を描き出そうとした勢の余り、兵術は十九世紀初頭に既に完成の頂点に達したかのような錯覚に迄陥ったのであります。その特徴としては、地形と陣形とに比重の大半を置き、方程式或は幾何学的解答に傾く風が強かったのであります。（中略）

理論派は十九世紀後半ドイツを中心にフォン・モルトケ、リュストウ、ブリュメ、フォン・デル・ゴリツによって継承発展されたため、経験派を圧倒して一世を風靡した形となったのであります。特に普墺戦争でモルトケの率いたプロシヤ軍が大勝を博してからは、理論派兵学は一層權威を持ったに至ったのであります。

然し理論派兵学は概念的、形而上学兵法論に力をいれすぎたため稍もすれば、抽象的、独断的に陥り易く、軍隊及び軍人の保守的特質と相結んで科学技術の進歩、社会の一般的発展と遊変する傾向が著しく現はれ勝ちでありました。

欧米における兵学は、ジョミニに代表される経験派兵学とクラウゼヴィッツに代表される理論派兵学に大別できる。大奈翁とは、ナポレオンのことであり、両名ともナポレオン戦争における経験に基づき、兵法書としてまとめられている。経験派は、教訓の事項を重視し、特に地形や陣形に注目しているの

高木惣吉と六韜（下平）

が特徴である。また、理論派は、モルトケによる普墮戦争の勝利により権威を得たが、独断的かつ保守的特質を有することに注意を喚起している。

二十世紀になってドイツにはヴェルノア、ケメレ、バルンハルディ、ファルケンハウゼン、シュリーフェン等が現はれ、フランスでは、ボナール、フォッシュ、ケスレ、ネグリエ、ラングロア等が出ましたが、新理論派とも称せらるる兵学者たちであります。

フォッシュ兵学の原則は、集中、兵力の経済的活用、行動の自由、（分散、集中、機動）、警戒、攻撃の五つに尽きるといえます。英國の軍事評論家リッデル・ハートはその『世界大戦の概貌』に於てクラウゼヴィッツの教義を盲目的に受け容れたものは佛國軍隊ほど極端なものはないと酷評して、失地回復の要望に頭が顛倒して継戦の力量も何も皆忘れて終ったのがフランスの將軍達だといっています。氏はまた戦車や塹壕速射臼砲や機関銃増備の提案されたとき、キッチナーはじめ英陸軍当局が如何にこれに反対し、ロイド・ジョージによって辛うじてその採用の路が拓かれたかを痛烈な皮肉を交へて摘発しているのであります。然しこれらは必ずしも理論派兵学の罪だけではないので、フランスのダリウ、カステックス、アメリカのビゼロウ、マハン等は明らかに新経験派というべきであり、英國のバードや史学者であるコルベットの海戦論等は単なる理論兵学とはいえないのであります。

経験派、理論派から、新経験派、新理論派へと兵学が発展していくなかで、高木惣吉は、フランス留学の経験を踏まえ、フォッシュ兵学に着目する。その原則は、集中、兵力の経済的活用、行動の自由、（分散、集中、機動）、警戒、攻撃の5つにある。また、特に、海洋戦略について、マハン、コルベットについても言及しているが、このフォッシュの原則が現在の海洋安全保障についてもなお色褪せていないことは注目すべきことである。

ロシア帝國時代の兵学は曾ってジョミニが露帝に招かれてこの兵法を教授して以後、スラヴの独創と見ゆるものもなく、永くブリュメの戦略論が教科書となっていました。十九世紀を通じて、スウォーロフとドラゴミロフ及び旅順に戦死したマカロフ提督が記憶に残る兵家であります。然しこれらの中、スウォーロフの思想の如きは『弾丸は馬鹿者、剣は若者』という程度の古い思想であります。

一九一七年に共産革命があつて後に最初に現はれたのは、スヴェーチンの消耗戦理論で、これはソ聯の工業的後進性と國狀地勢に應じて決戦を避けるクツゾフ流の戦法を發展させたのであります。一九二九年後、五ヶ年計画の實現に伴つて機械化部隊、技術部隊、航空部隊等の強化によって再び殲滅戦理論が復活し、フェリドマン、イッセルソン等の積極的兵学が現はれました。第二次大戦は前半はスヴェーチン戦法で後半ドイツ軍の頽勢に乗じて大規模のシュリーフェン式戦法に轉じておるのであります。

高木惣吉は、欧米の兵学の最後にロシアについて分析し、ロシアは当初獨創的なものは少なかったものの、決戦を避ける消耗戦から殲滅戦へと、積極的な兵学へと發展していったことを示している。また、それを可能としたのが5か年計画による経済力及び軍事力の強化であったことを指摘している点に興味深い。

(5) 日本における欧米兵学の取入れ

わが國でははじめフランスの兵制を学んでいたのでありますが、普佛戦争でプロシヤが勝つてからは、ドイツを師として、メッケル少佐を陸軍大学の教授として迎へ、尔来、思想的にも制度的にも全くドイツに傾投し、心酔してドイツ兵学のエピソードなるに過ぎなくなつたのであります。

陸軍においては戦史の研究者は相当あつたようではありますが、心を潜めて兵学の研鑽に精進した人を見受けません。最近ジャーナリズムに喧傳された石原莞爾中将の如きもナポレオン戦史の研究者にすぎないので、その兵学思想に至つては極めて獨断的、主観的殲滅戦理論を誇張したにすぎないのであります。

海軍は制度編成をイギリス海軍に学び、兵学思想をダリウ、マハンに仰いだのであります。佐藤鉄太郎中将の國防史論はマハンの海上権力史論に倣つたもので、わが國としてはかなり眞面目な海戦史の研究であります。その海軍戦理学も概ねマハンの攻勢、集中、運動、決戦等々の原則を祖述したものであります。佐藤中将と並び称せらるる秋山眞之中将は戦史家の色彩よりも兵術研究者というほうが適當かと思われれます。而して氏は、マハンの外にも水軍の研究などに力め、わが古典兵学も多分に玩味したと見ゆるところがありますが、主として兵術方面で、兵道にも心を留めた認めらるる証跡がありません。兎に角、同中将の兵学として体系化されたものが残らず一個の實務家として終つた嫌があるのは實に惜し

高木惣吉と六韜（下平）

むべきであったと考えます。

尔来わが陸海軍に於ては眞摯な兵学の研究が成就されなかったために、大正、昭和のわが軍備は外形の物々しかったのに反して、その内容甚だ寂寞たるものでありました。海軍に於て近代哲理を基礎とした兵学を創建しなければならぬと、昭和十三、十四年頃から不肖を顧みず主張しまして、この後及川大将が海軍大学校長として、この考えを支持しいろいろ研究に着手して貰ったのですが、業は唯緒に就いた許りで大戦となり、全面的の敗北となってしまいました。

高木惣吉は、日本における欧米兵学の取入れについては非常に厳しい評価を下している。日本は、基本的に兵制については、当初フランス式、その後、ドイツから学んでいるが、エピゴネン（Epigonen）、つまり亜流、模倣者に過ぎず、本質を欠いた表面的理解と酷評している。

陸軍は、戦史の研究は行ってはいたが、極めて独断的主観的であり、石原莞爾についてもナポレオン戦史の研究家に過ぎないと断じている。

また、海軍については、戦史の研究はこれも真面目に行っていたが、マハンの原則を受け継いだ程度であり、秋山真之にあっても主として兵術を重視したものに留まり、兵道までには至らなかったと断じている。

つまり陸海軍とも、兵学研究は実施してはいても、成就することなく、その内容が甚だ乏しいものであったと分析している。まさに、兵学の創建こそが必須であったのである。

3 太平洋戦争の教訓

『六韜新論』の第六章は、「兵道」と題し、兵学に照らせ合わせて太平洋戦争における教訓を論じ、欧米兵学の習得上の欠陥を指摘している。

(1) 欧米兵学の神髄を不理解

龍韜軍勢第二十六に、

『故に善く戦ふ者は、軍を張るを待たず、善く患を除く者は未だ生ぜざるに理

む。敵に勝つ者は形なきに勝つ、上戦は與に戦ふ無し、故に勝を白刃の前に争ふ者は良將に非ざるなり。備を已に失へるの後に設くる者は、上聖に非ざるなり。智、衆と同じきは國師に非ざるなり。技、衆と同じきは國工に非ざるなり。

事（兵の事）は必ず克つよう大なるは莫く、用（兵を用ふる）は玄黙（玄妙秘黙）より大なるは莫く、動は不意より大なるは莫く、謀は不識よりも大なるは莫く。云々』

日露衝突の際、露國の国力、軍備ともに當時の日本に数倍して勝利の確信を持ち得なかったのですが、然し大英帝國はわが同盟國であり、米合衆國も亦わが同情者であった。既に勝つべき体勢は外に整っていた。併かも内に國民は臥薪嘗胆を叫んで十年穩忍して来ていたのでその結末も亦強靱たるものがありました。

これに較べて太平洋戦争はどうでありましたか。昭和十六年七月五日、万一日米戦争となった場合の戦勝の見透しについて、陛下から質問があった時、永野軍令部総長は、これを放置すれば生命に係る重患に日米関係を例へ、手術（戦争）すれば或は助かることもあり得るといふ僥倖に期待する旨を説いた。併かも國際關係にも國內の結束にも、必勝を期する要素は何一つ備はってはず、またこれを整えようとする眞剣の努力も拂はれないままで、開戦となってしまったのであります。而もわが陸海軍の兵術思想はドイツ及び英米兵学の皮相を容れて、その眞髓を体得する域に至っていません。

日露戦争において、国力及び戦備ともに勝るロシアに対して勝利を得ることができたのは、英米を味方にするという外交的に勝つべき態勢を作っていたことと國民の堪忍と強靱さという国内要因が整っていたことにある。

一方で、太平洋戦争においては、勝利を期待するばかりで、必勝の準備は備わらず、かつそれを整える努力もされていなかった。

欧米の兵学の表面のみに囚われて、その神髓の理解を欠いたことが敗戦の決定的な要因である。

(2) 旧思想の支配

クラウゼヴィッツの残した『白兵戦は明かに戦闘の眞の基底を見なさるべきである』という過去一世紀の教條と、『決定地点に優勢なる兵力を集中するは勝敗

の決を興ふるものである』という集中の原則の中のその兵力とは『銃剣の数』であるという旧い思想は欧米では既に第一次大戦の後半に於て放棄されたものであります。然るにこの一代も前に単なる兵学史上の一挿話と化した思想が現實に生きてわが國の戦争指導方針を振り廻したとは、後世恐らくは誰も信じようとしない不可思議の一つでありましょう。然しこれは決して誇張でなく、現に國內の産業研究、その他の枢要の地位にある人物を動物の如くにかり集めて、これを最も未熟、非能率の下級列兵として中國又は南方戦場の白骨と化せしめて惜しまなかつたのであります。その極まるところ戦局の最後には小銃もなく、服装も揃わぬ見せかけだけの本土防衛、軍の頭数を並べるために百五十万の國民をその戰場から奪い去って食糧と軍需生産の自殺的破壊を断行したのであります。

日露戦争当時の兵学思想が絶対視され、すでに通用しなくなっている兵学にもかかわらず、太平洋戦争において支配的であつた。それはとりも直さず、その兵学思想の神髓を理解していなかつたことに起因する。

(3) ドイツ式の直輸入

孫子虚實第六に曰く、『故に善く攻むる者は、敵其の守る所を知らず、善く守る者は、敵其の攻むる所を知らず。微なる哉微なる哉、無形に至る、神なる哉神なる哉、無声に至る。』

一八六七年普墺戦勝の余威をかって北ドイツ聯邦を組織し、マイン河以北二十一邦をこれに編入したプロシヤは、一八七一年、邦翁三世のフランスを破つて二十五聯邦を統一してドイツ帝國を建設し、ウィルヘルム一世を皇帝に奉じたのであつた。然しバヴァリアとウエルテンブルグは独自の軍制が保たれることになつた沿革から、ドイツ陸軍は、聯邦がそれぞれ養成した軍隊をプロシヤの支配下に結束させ、これを戦場の常勝軍たらしめるために、統一陸軍の神系々統としてプロシヤ出身エンケル中心の参謀官は、各軍に配属されて軍司令官の目付け家老となり、ゲー、ペー、ウーとなり、時あつては総司令官の代理となることもできた。第一次大戦のとき西部戦線のマルヌの激戦でガリエニ將軍のパーリ防衛軍に右翼を突かれて苦戦ながら、勝利の信念に燃えていたドイツ第一軍クルック大將に専断退却を強要し、敗戦の大原因を作つた大本營参謀ヘンチェの如きはその極端な代表の一例であります。

わが長閥陸軍はこのプロシヤ式をその倣直輸入したので、その制度の裏には前

述の攻撃万能の大陸思想を植付けたのでありましたから、六韜や孫子の『無形』の兵法など凡そ縁遠いものとなってしまったのであります。

陸軍はドイツ式をそのまま直輸入したために、攻撃万能の大陸思想となったのはある意味当然の帰結であり、したがって、ドイツ兵学の神髄を理解しなかったばかりか、およそ『六韜』や『孫子』などを理解することなど縁遠いことであったのである。

（4）日本の主体的精神の忘却

明治維新前後から、欧米の軍備、特に海軍の威力に驚いたわが國の朝野では、只管欧米式軍備をとりいれ、欧州兵学を学ぶに専念して日も亦足らずという有様でありました。その成果をして日清、日露の両戦役に勝利を取むることが出来たということは、これは争えない事実といえます。が今日から静かに反省してこれらの欧米の科学的新軍備を輸入しこれを活用した日本國民の主体性というものは、これは決して大正、昭和時代の軍人－政治家に宿ったものとは同一でなかったと考えられます。

つまり、明治の初期から中期に活動したわが國の先覚者の主体的精神というものは、神、儒、佛の古い殻の中に育ったものには相違なかったが、長い年月の完成だけに調和のとれたものであった。それが欧米文化の摂取に夢中になった結果、大正、昭和時代の指導者はひどく均衡の破れた魂の持主となったのではありますまいか。人生観を持たない専門学者、世界観と縁のない政治家等が時を得顔に支配した過去二、三十年の総決算が現在に見うけらるる日本の姿となったと言えないでしょうか。

日本は、明治維新前後から、欧米の軍備、特に海軍力の威力に大きな危機感を抱き、欧米式軍備と欧州兵学の取り入れに専念した。明治期は、日本の主体的精神と調和のとれたものであったが、大正・昭和期にあつて欧米文化の急速な摂取は、その均衡を破るものとなつてしまい、日本の主体的精神は徐々に忘却されることとなつたのである。

（5）兵道を学ぶことの忘却

扱って話を兵道に戻しまして、わが陸海軍は欧米の兵術、兵学をとり入れるに汲々として一応それは成功したといえましょうが、然しそこに致命的な欠陥を残した俣に最後迄気付かなかった。いう迄もなくそれは兵道を学ぶことを忘れたことでありました。然しこの兵道を現実的、存在論的、自然科学的欧米兵学から学ぶことは本質的に不可能でありました。

然らば欧米には戦争に対する倫理的基礎づけはないのかといえば、それは欧米の兵学に含まれていないというだけであって、基督教の精神とルネッサンス以後のヒューマンティの思想は一般の政治文化と同様に欧米兵学の根底に流れておることを看過してはならないのであります。

東洋古来の兵学は元来規範的形而上学的のものでありますから、所謂兵道というようなことはその最も特色とするところであります。然るに日本では、七、八十年来、欧米に学ぶに急であった余り、この技術兵学だけを追って、その地下構造ともいべき宗教も哲学も、ヒューマニズムも殆んど無視して顧みなかったということは、その後にクローズアップして来たわが國の軍人たちが、どんなに人間的資格を欠いた連中となってしまったに照してみて明瞭であります。

以上は日本の反省でありましたが、第二次大戦後のソ聯と米國と露骨な軍國的膨張政策も亦決して独逸や日本よりも優れたものとは見受けられません。

陸海軍にとって、致命的な欠陥は、兵道を学ぶということを忘れてしまったことである。欧米の兵術、兵学を学ぶ必要が出てきて、表面上は兵術の習得はなし得たが、その兵学の神髓を理解することなく、さらには、欧米の技術兵学の習得のみに偏重し、宗教や哲学の必要性和重要性を無視してしまったのである。

4 兵学の教え

『六韜新論』の第五章は、「柔弱の徳 去両葉」と題し、天皇陛下と軍部の関係に分析を加えているが、最後に、次のとおり兵学の教えを紹介している。

明傳第五の中の

『柔にして静、恭にして敬、強にして弱、忍にして剛、此の四つの者は道の起る所なり。云々』とありますが、これは淡々と述べてありますが、實に深遠な教訓としてその盡きぬ味を覚ゆるものであります。

老子第八章に

『上善は水の如し、水は善く万物を利して争はず、衆人の惡む所に處る、故に道に幾し云々』とあります。又同第七十八章にも、

『天下柔弱なること、水より過ぎたるは莫し、而して堅強を攻むるに、之に能く勝つもの莫し。其の之に易ふる無きを以てなり。弱の強に勝ち、柔の剛に勝つ、天下知らざる莫けれども能く行ふこと莫し。是を以て聖人言ふ、國の垢を受くる、是を社稷の主と謂ひ、國の不祥を受くる、是を天下の王と謂ふと。正言は反するが若し』

論語雍也第六には、

『子曰く、知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ。知者は動き、仁者は静かなり。知者は楽しみ、仁者は寿し。云々』

孫子はいろいろのところに水を比喩に引いていますが、その最も美しい形で表現された極意は虚實第六の末段の一句であります。

『夫れ兵の形は水に象どる。水の形は高きを避けて下きに趨き、兵の形は實を避けて虚を撃つ。水は地に因って流を制し、兵は敵に因って勝を制す。故に兵に常勢無く、水に常形無し。能く敵に因りて変化して勝を取る者、之を神と謂ふ。故に五行（火水木金土）に常勝無く、四時に常位無く、日に短長あり、月に死生あり。』

孫子兵学至極の教は常にこの無形無勢の一句にあると思うものでありますが、これは解説すべきでなく、自得すべきものと信ずるところであります。

このように、兵学の教えについて、水に例えて紹介しており、兵学は無形無勢であり、解説するものではなく、自得する必要があるとまとめている。

そして、太平洋戦争に至った過程について、次のような見解を示している。

カイゼルの率いたドイツ帝國も、ヒットラーの指揮したドイツ第三帝國も、共に強剛なる点では天下無類に見うけられました。然し唯その強剛を頼んで柔と弱

との更に尊い利徳あることを理解しませんでした。（中略）

武韜発啓第十三に、『全勝は門はず、大兵は創づくことなし』とあります。また、呉子圖國第一に、『故に曰く天下戦國、五度勝つ者は禍なり、四度勝つ者は弊なり、三度勝つ者は覇たり、二度勝つ者は王たり、一度勝つ者は帝たり。是を以て、数々勝って天下を得る者は稀にして、以て亡う者は衆し。』

わが日本も日清、日露の戦争までは、仮令昨今わが敗戦の弱身につけこんでいろいろの悪名をきせる外國もあるが、とこの國が何と批評しようとする当時の日本としては已むを得ない自衛の戦で、國民悉くその所信を持った。然しその後の出兵事変、戦争一つとして已むを得ざるに出たものはなかった。而も強引に次ぐ強引の押しの一手であった。國の弊となり、人の禍となって遂に今日の悲境におちたのであって深く後世の誠とすべきであります。

このように、太平洋戦争に至る過程は已むを得ないものとは言えず、強引に次ぐ強引であったがために、日本にとって禍となったことが判る。

おわりに

最後に、『六韜漫談』七、雜輯をみれば、『六韜』における関心事項を伺うことができる。

六韜の最も味のある又他の兵書経書から特色のあるところ或は詳論してあるところを検討した。今回はその他全篇に互って注目すべき諸點を簡略に渉獵したい。

- (イ) 賞罰第十一は、日本の常套語となっている信賞必罰を説く。
夫れ誠は天地に暢び、神明に通ず。而るを況んや人に於いてをや。
- (ロ) 兵道第十二
純一不二を説く。心と事行を説く。三昧の妙境か。
- (ハ) 発啓第十三、文哲第十四、老莊無為の説を汲む。
天下に志ある者の事を起すの慎密なるべきを評論す。
- (ニ) 文代第十五、三疑第十七
宣傳、謀略戦を説く。
- (ホ) 勵軍第二十三、礼将、力将、止欲ノ将

太平洋戦争に於ける我が統帥の頹廢

(へ) 陰符第二十四、陰書第二十五

暗号通信の重要性

(ト) 軍勢第二十六

抽象的比喩的であるが、眞髓に与るものがある。

(チ) 兵徵第二十九

勝負の徴は精神先づ見はる。明将之を察す。其の効人に在り。

(リ) 農器第三十、兵農一致、兵法の身常の身

故に兵を用ふるの具は盡く人事にあり。善く國を為むる者は人事に取る。

(ヌ) 練士第五十三

組織、養成、琢磨を説く。

(ル) 文師第一²⁾。

このように、信賞必罰、統帥、情報、人事、組織等、『六韜新論』においては、人が中心にあることを教訓としている。そして、高木惣吉が著した『六韜新論』は、太平洋戦争に至る近代日本の歴史を舞台に展開された、政治・外交と軍事の関係を現実的に捉え直し、『六韜』に投射しているのである。したがって、六賊七害が跋扈する現代において、高木惣吉が説く「愛民、拳賢、心耳目」、つまり国民を視点に、広く知見を集めることによって、初めて歴史の教訓が生かされ、高木惣吉が結集した理念が現実化する過程を進み始めることができるのである。

『六韜新論』の「あとがき」には、新たな時代に必要なものとして、次のようにまとめられている。

忘れるということは、賢い處世法には相違ないでしょう。特に太平洋戦争鉄火四年の地獄のような思ひ出は、その苦悩に身魂を削った人々にとっては単に記憶を甦がえらせるということだけでも、無駄な消耗とも思われるでしょう。然し反省を回避し、過去を忘却することは毫も史實の変更ということにはならないし、況して新しい時代の建設にも連続しないのであります。新しい誕生には、矢張り生れ出づる苦痛が伴わなければなりません。

高木惣吉と六韜（下平）

このように新時代においては、過去を忘却するのではなく、過去の反省と言った痛みが必要である。

E. H. カー（Edward Hallett Carr）は、「優れた歴史家たちは、意識すると否とに拘らず、未来というものを深く感じているものです。『なぜ』という問題とは別に、歴史家はまた『どこへ』という問題を提出するものなのであります。」³⁾と述べている。つまり、現在がどのようなときであり、これからどこに向かうのかということを見据えるとき、太平洋戦争後の生成点を振り返ることが重要となるのである。したがって、現在を定位するため、拳拳服膺すべきは、高木惣吉の畢生の大著『六韜新論』と『六韜漫談』に学ぶべき教訓が余りにも多いことが判明する。なぜならば、そこには戦争が失敗に至る必然が非常に明解な言葉で縷述されているからである。

注

- 1) 海上自衛隊幹部学校所蔵「六韜新論」『高木惣吉文庫資料』（1978年5月3日、茅ヶ崎）（以下、『高木惣吉文庫資料』と言う。）以下、本文中、註がない引用は同資料からの引用である。
- 2) 「六韜漫談」『高木惣吉文庫資料』。
- 3) Edward Hallett Carr, *What is History?* (London: Macmillan, 1961), p. 102.